

2011 年度前期学生授業評価アンケート集計結果に対するコメント —社会イノベーション学部—

社会イノベーション学部長 篠原 光 伸

社会イノベーション学部の授業に関して、学生は概ね高い総合的評価をしており、授業内容も学生の学問的関心を引き起こし、学力を向上させるものであったと評価している。また学生側についていえば、授業への出席率は高く、授業中は高い意欲を維持しているが、授業を補完する予習・復習までには手が回っていないという実態が浮かび上がってくる。教員側については、熱意、シラバスを含めた講義内容、授業レベル、休講の頻度、授業時間については学生から高い評価が得られているが、話し方、板書・スライド内容の読みやすさ等の授業方法に関してはまだ工夫の余地があるといえる。さらに、教員側からも予習・復習などの自主学習を奨励するための工夫を今後とも考えていく必要があるといえる。

2011 年度前期アンケートの対象となったのは 46 科目であり、このうち 45 科目から回答を得た。未回答の 1 科目は今期代講により当初と担当者が異なった為に、アンケート調査は未実施としたものである。また、通年科目については調査対象となっておらず、その分だけ対象科目数は少なくなっている。調査対象となっている科目の全履修者数は 2,650 名であり、これに対しアンケートに回答した者は 1,570 名であった。従って、今回のアンケート回答率は 59.2%である。

次に、各設問毎に集計結果を見て行きたい。【設問 1】の出席率に関する調査であるが、多くの学生が熱心に授業に出ていることが窺える。回答者を実数で追跡すると、「90%以上」と回答した者は 856 名であり全体の 6 割を占め、また「89～80%」と回答した者は 341 名であり全体の 24%を占めている。出席率でみる限り、本学部では良好な修学状況が保たれていると言える。

【設問 2】では意欲的に授業中取り組んだかを尋ねた。回答者を実数で見ると、意欲的に取り組んだとする者は 516 名で 35%を構成しており、分布で見ても高スコアの側に回答者が集中している。このことは学生達の授業への積極的な関与を示していると考えられる。

では、教員の講義への取り組みは、学生達にどのように評価されているのであろうか。【設問 3】では教員が授業時間を有効に利用したか否かについて問うている。有効に利用したと評価する者は 620 名で、全体の 42%と最も多くなっている。学生達から見て、本学教員は授業時間を有効に利用していると評価されている。

教員の休講や遅刻の多さを尋ねる【設問 4】では、「そう思わない」と回答した者は 802 名で全体の 54%を構成し、分布全体でも休講や遅刻は非常に少ないと評価されている。設問 4 は設問 3 と表裏をなす関係にあり、学部教員が授業時間を十分に利用している姿勢が浮かび上がってくる。

ただし、教員の話し方については、少し改善の余地があるのかも知れない。【設問 5】では教員の話し方が明瞭であったか否かが問われているが、はっきりと明瞭であると評価した者は 535 名 (36%) で全体の 1/3 程度であった。反対に、あまり明瞭でないと評価し

た者はおよそ 200 名 (13%) と、8 名につき 1 名ぐらいいは、教員の言葉が聞き取りづらいつと感じている。この点については、積極的に前方に着席すること、天井スピーカーに近い席に座ること等を、教員自らが講義開始前に学生達に促したり、マイクロフォンの使用方法の習熟、講義時間中の私語禁止等の教室管理でかなり改善するものと考えられる。

次に【設問 6】の授業レベルの適切性についてであるが、適切性に対して最も高い評価を回答した者は 364 名 (25%) であり、分布全体でも高い評価をした者が 60%以上であった。本学部の場合、政策・戦略・社会・心理と教育内容が多岐に渡るが、個々の教員はしっかりした内容の、しかも学生レベルに見合った程良い難度の講義をしているといえる。

【設問 7】の教室内環境に関する質問では、高い評価をした者は 1,127 名であり、これは全回答者の 75%を構成している。今後も現状の維持・向上を心掛けることで、修学効果はより一層高まることが期待される。

【設問 8】は授業に対する教員の熱意を感じられるかどうかを尋ねた質問である。ここでも高い評価をした者がおよそ 70%以上おり、最も高く評価した者も 543 名 (37%) いた。また、この項目は授業を総合的に評価する項目との相関が 0.79 と特に高い。教員の授業へ取り組み姿勢が、学生による高い総合評価の主要因となっている。

しかし、【設問 9】の「教員は発言・議論等授業参加を積極的に促したか」という質問については、回答が 2 分割されている。この項目に対して最も高く評価する者が 372 名 (25%) いると同時に、2 段階低い中程度と評価するものも 394 名 (27%) いる。今回の集計では、講義形式の授業評価と英語セミナーなど演習形式の授業評価が混在していることから、このような結果になったと推察される。

【設問 10】のシラバス内容と授業内容の整合性について尋ねた結果であるが、最も高い評価をした者 526 名 (36%) を含めて、高い評価をした者は、全体の 7 割以上を占めており、問題のないレベルにあると考えられる。

【設問 11】では「この分野の関心と学力が得られたかどうか」を尋ねている。最も高い評価をした者およそ 3 割を含めて、高い評価をした者は、全体の 7 割を占めている。授業内容は確実に学生の関心と学力を高めるものになっているといえる。

【設問 12】は「総合的にこの授業を評価できるかどうか」を質問している。最も高い評価をした者は 557 名 (38%) あり、これらを含めて高い評価をした者は 1,119 名と全体の 75%になっている。全体として、学部で提供している授業に対する評価レベルは、非常に高いことが確認された。この設問に関しては付帯情報としてその他の設問との相関分析がされている。教員の熱意とこの項目との相関係数が 0.70 と高いことは先に指摘した通りであるが、相関係数 0.79 と高かったもう 1 つの項目が、設問 11 の分野への関心や学力修得を尋ねた項目である。授業における教員の熱意、学問的関心の喚起、そして学力獲得といったことが、高い総合的評価に結び付いていることが分かる。

【設問 13】の教員の板書・スライド内容の読みやすさに関する項目では、最も高い評価をした者 412 名 (34%) を含めて、高い評価をした者は 778 名 (64%) であった。講義教室は大きいことも多く、後部座席からは文字の大きさが十分でない場合もあることだろう。教員側はより見易い大きな字を書くことを心掛けると共に、学生側も字の見易い前方に着

席するなど努力が求められよう。

さて、【設問 14】において回答者に予習・復習の状況を尋ねているのであるが、予習や復習をよくしたとする者は 90 名（8%）しかおらず、あまり行っていない者が全体の 45%という結果になっている。本来、大学の講義は予習と復習をセットにして考えられており、それを十分にすることなく授業を評価するとなると、おそらく授業評価の内容にバイアスが掛かり易くなる。事実、この項目と設問 12 の相関係数は 0.32 と極めて低い。授業できちんとノートを取り、そのノートを図書館にある専門書などと照らし合わせ、内容を吟味し整理するといった知的作業は、学生には必要不可欠であり、これを疎かにすることがあってはならない。